

151

2026 WINTER

美術館 NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 22

坂田一男《コンポジション》(部分)

制作年不詳

油彩・カンヴァス

32.6×23.7 cm



岡山県立美術館

OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

近現代岡山の美術家とキリスト教 —鹿子木孟郎と竹久夢二の場合

橋村 直樹(学芸課長)

2026年1月9日から始まる特別展「美と祈り—近現代日本美術にみるキリスト教」に関連し、ここ数回の美術館ニュースでは「近現代岡山の美術家とキリスト教」をテーマに連載してきた。本号では最終回として、鹿子木孟郎と竹久夢二という2人の美術家について取り上げたい。

岡山は、明治・大正・昭和にかけて、日本の近代美術史に確かな足跡を残した2人の巨匠を輩出した。写実主義の洋画家・鹿子木孟郎(1874-1941)と、「大正ロマン」を象徴する竹久夢二(1884-1934)である。両者はその芸術世界こそ大きく異なるものの、その創作の根底には、西洋文化を形づくった重要な精神的基盤であるキリスト教との接点が見いだされる。彼らの芸術と信仰の交錯を辿ることは、近代日本の画家が、いかに西洋の精神文化を受容し、自らの表現へと昇華させたかを知る手がかりとなる。

鹿子木孟郎は、3度のフランス留学を通じてアカデミックな写実主義を学び、関西洋画壇の中心的存在となった。しかし、彼の写実へのこだわりは、単なる技法の追求と捉えるだけでは不十分である。本展と並行して取り組んでいた鹿子木孟郎展のための調査により、自筆文書「不倒漫筆」(『鹿子木孟郎史料集』学芸書院、2016)から、鹿子木が自然や人体を「神が宿るもの」と捉えていたことが明らかになった^{*1}。その文書には、「此地球万物ハ神ノ作リ玉ヒシモノシニシテ 天然ノ風景 健全ナル人体ニハ実ニ神ノ宿ルナリ 心ヲ天堂ニ寄スモノ神ヲ拝シタキモノ先ツ身辺ニアル天然ノ風景健全ナル人体ヲ拝セヨ 之レ神ヲ拝スルナリ」や「理想ハ神ヲ期ス 神ハ本体ナケレトモ形ヲ仮テ顕ハレ出ズ コノ形コソ至貴ナルモノナリ 我カ画カント欲スル点實ニ此ニ存ス」といった言葉が遺されている。自然や人間の姿を丁寧に描くことは、神の創造を証し立てる行為であるという信仰に基づくものであった。鹿子木の写実は、対象の形を正確に写すことを通じて、被造物の尊厳を書き出そうとする精神的営みであったといえる。

鹿子木には幼少期から信仰と触れ合う環境があった。宇治孟郎として生まれ、7歳で鹿子木家に養子入りしたが、その養家は明治初期に岡山カトリック教会の初代神父アンリ・ヴァスロンを一時住まわせていた^{*2}。また、最初の留学では、アメリカ経由でパリへと至るが、その滞米中の日記「米国みやげ」には毎週ではないものの日曜日に「チャーチに行く」との記述も確認され、大正期にはカトリック雑誌『聲』を購読していた。さらに、3度目のフランス留学中に母の計報を受けた際の手紙には、「母上様ノ如キ方ハ必ス天国ニ赴カルベク 余モ行ヲ正シ(中略)必ス天国ニ於テ母上様ニお目ニ懸ル事ヲ得ル様にナスヘク」という天国での再会を願う言葉が記されており、深い信仰心がうかがえる。

こうした背景を踏まえると、鹿子木の写実主義や晩年の象徴的な作品は、信仰に根ざした美の探求であったことが理解できる。現在所在不明ながら、イエスの

降誕を描いた《インマヌエル》(下図)という作品が遺されていることも、信仰が制作の主題に直接影響を与えていた証左である。

一方、竹久夢二とキリスト教の関わりは、鹿子木のそれとは異なり、より内面的な精神の探求と、作品における象徴的な引用として現れた。夢二は生涯にわたって聖書を常に携帯していたことが知られている。彼のキリスト教的なモチーフへの関心は「南蛮趣味」という観点から語られることが多いが、それだけでは説明できない深い精神的アプローチがあった^{*3}。

この関わりを考察する上で重要なのが、1918(大正7)年の「竹久夢二抒情画展览会」である。この展覧会の出品作のタイトルには、彼の精神世界を強く反映したキリスト教的な要素が濃厚に見られる。たとえば、第3室には《悲哀の奥に聖地あり》や《祈り》、《埋葬》といった宗教的な世界觀を想起させる作品が展示された。

なかでも《愛》は象徴的である。夢二は日記の中で、この「愛」は男女の恋愛ではなく、信仰や神を想定していたと述べている^{*4}。これは、彼の抒情画の根底に流れるテーマが、単なる恋愛感情を超えた、より普遍的で宗教的な愛の概念にまで達していたことを示している。

また、この展覧会が京都での開催後、神戸のキリスト教青年会館(YMCA)へ巡回したという事実は、夢二がカトリック的な「南蛮趣味」だけでなく、プロテスタント的な環境とも親密な接点を持っていたことを示唆している。さらに、彼が京都の洛陽教会と関わりを持っていた可能性についても指摘されており^{*5}、教会という具体的なキリスト教の施設との交流を通して、彼の精神世界が形成されていったことがわかる。

夢二の芸術におけるキリスト教は、罪と聖、生と死、理想と現実の葛藤といったロマン主義的なテーマを象徴的に表現するための不可欠な言語であり、彼の「抒情画」の深みと普遍性を支える土壌となっていた。

鹿子木孟郎と竹久夢二。2人の岡山出身の美術家は、近代という激動の時代において、西洋の美術と、キリスト教という精神文化と向き合った。鹿子木は、写実と象徴を通して「神の創造」を描こうとし、夢二は、抒情の奥に「祈り」や「愛」の普遍的な感情を託した。

2人の作品を通して見ると、明治以降の岡山が、キリスト教を比較的早く受け入れた土地であったこと、そしてその精神的環境が新しい文化への探求心を育んだことが浮かび上がる。特別展「美と祈り—近現代日本美術にみるキリスト教」では、こうした背景を踏まえながら、近現代日本美術に息づく「祈りのかたち」を感じ取っていただきたい。

【特別展】「美と祈り—近現代日本美術にみるキリスト教」(会期:2026年1月9日~3月1日)

*3: 竹久夢二とキリスト教の関係については、主に以下を参照。関谷定夫『竹久夢二精神の遍歴』東洋書林、2000年、小嶋洋子『夢二とキリスト教—竹久夢二抒情画展覧会』(1918年)をめぐって—』『人文論究』第56号、2006年、195-210頁、鐸木道剛『洛陽教会の竹久夢二』『竹久夢二研究』第4号、2025年、6-21頁。

*4: 小嶋、199頁。

*5: 鐸木前掲論文。



鹿子木孟郎《インマヌエル》
出典:竹中正夫編著『聖書の言葉—現代日本美術とともに』(創元社、1966年)より転載

広瀬臺山の藍瑛画學習

森田 詩織(学芸員)

本作は令和6年度に受贈した広瀬臺山(1751-1813)の山水図で、次の自賛がある。

倪元鎮師荊闊為骨力清勁之妙加以董巨／潤墨則全聖也是作近董巨未能青藍耳／
鑒賞正之 臺山清風

これは、杭州の画家・藍瑛(1585-1664)が元末四大家の一人・倪瓈を意識した作の款記を引用したものとみられる。

市河米庵は蒐集図録『小山林堂書画文房図録』巻丙(嘉永元[1848]年刊)に、所蔵の藍瑛画について、嘗て高松板子汎が手に入れた十二幅中の一幅と記す。これは倣米芾画^{*1}で、米庵はこのほか王維、王蒙、倪瓈、趙令穰、李晟(成)、李唐、呉鎮、黃公望に倣った計九幅を見ことがあると、各題款を記録する。このなかに「倪元鎮師荊闊以骨力清勁之妙。參以黃巨潤墨。則全聖也。是作近董巨。未能青藍耳。鑒賞正之。^{*2}」とあり、臺山の賛がほとんど重なる。

このうちの一幅とわかる「秋景山水図」(静嘉堂文庫美術館蔵)は倣王蒙で、谷文晁の模本と貫名海屋による安政5(1858)年の跋とを伴う^{*3}。海屋は藍瑛画の多くが「東讃」にあると記す。図様は不明だが、長町竹石所蔵の藍瑛画は十二幅中の倣黃公望で、高松で珍重された^{*4}。また、倣趙令穰(京都国立博物館蔵)、倣李唐、倣李晟^{*5}の山水図で、米庵の記録と一致する賛の藍瑛画が伝わる。倣李晟は渡辺玄対旧蔵で、玄対は十二幅中の二幅を所蔵した^{*6}。十二幅は散在し、藍瑛画は画法の情報源として各地で重視された^{*7}。

十二幅中の倣倪瓈画は知られず、臺山が参照した内容や過程は明らかでない。倣倪瓈図の典型である折帶皴を本作は強調しないが、前景の大きな樹木や画面の片側にそびえる主山は藍瑛の作を想起させる^{*8}。また、臺山が藍瑛に倣った「秋壑觀泉図」^{*9}では、本作と同じく三角形の紅い葉を多く描く。

本作の箱の表には「臺山翁秋景山水 雲洞題簽」、小口の貼り紙には「臺山筆／溪山秋霽／絹本淡彩／画帖の六拾六頁」とあり、いずれも近代以降の筆と思われる。大正元(1912)年に開催された臺山遺墨展の図録『白雲余影』の66点目に本作が「土居通憲氏蔵」と掲載され、「画帖」はこれを指すのであろう。土居は岡山出身の衆議院議員。大正元年には本作が岡山にあったと推定されるが、この前後の所蔵者はわからない。

臺山は天明元(1781)年より津山藩江戸藩邸に務め、文化8(1811)年に津山へ帰郷するまで、玄対や文晁、米庵ら関東の人々と親しく交流した。文化4(1807)年の「米法雨露山水図」(岡山県立博物館蔵)は、前景の松樹から橋、主山の形など、米庵所蔵の倣米芾藍瑛画を参照したといえよう。本作もまた江戸での作であるのか、臺山の画風変遷とあわせて今後の課題である。



広瀬臺山《秋景山水図》18-19世紀
絹本淡彩 110.6×35.8cm

*1:『東洋美術大観』第11冊(審美書院、1911年)に載る図(三条家蔵)がこれに一致する

*2: 東京国立博物館所蔵本を参照した。下線は筆者による

*3:『日本の文人画展Ⅱ』(静嘉堂文庫美術館、1996年)pp.75-76

*4: 次田吉治「長町竹石考—画人伝や画論書等の基礎資料検証を中心に」(『美術史』183号、2017年)

*5:『写山樓谷文晁』(栃木県立美術館、1979年)図163、164

*6: 河野元昭「文晁と藍瑛」(『大和文華』105号、2001年)

*7: 濱住真有「中国山水画受容の一様相—池大雅筆「白雲紅樹図」をめぐって」(『美術史』156号、2004年)、横尾拓真「中林竹洞の倣黃公望

作品について—江戸時代後期の黃公望画受容の一様相—」(『名古屋市博物館研究紀要』48巻、2025年)

*8: 塚本磨充「中国絵画の至宝をめぐる旅」(『上海博物館 中国絵画の至宝』東京国立博物館、2013年)pp.145-147

*9:『廣瀬臺山「白雲餘影」とその後』(津山郷土博物館、2010年)作品番号22

岡山県美ボランティアの現在

橋 凜(学芸員)

当館のボランティア組織は1988年の開館と同時に発足し、今年38年目を迎えた。新規会員募集は毎年行っており、多少の変動はあるもののここ数年100名前後のボランティアが活動している。無償の活動にも関わらず、多くの方に美術館の活動を日々支えていただいていることに感謝が絶えない。

40年近い歴史を重ねる中では様々な糺余曲折があったと伝え聞くが、1998年に発行された『岡山県立美術館ボランティア 10周年記念誌』以降、その有り様や変遷を記録する発行物はあまりない。本稿では2025年時点での当館ボランティアの活動内容を簡単に記述するとともに、2022年から運営に携わってきた筆者が、組織を継続する上で課題を感じていることを書き添えたい。

当館のボランティアは「来館者と美術館の架け橋になろう!」をスローガンに掲げる。基本的な活動内容はエントランス案内と新聞切り抜き、さらに収蔵品展でのギャラリートークである。ギャラリートーク以外の活動は2週間に1度の当番制で行われることから、「当番班」という名で60~70名が所属する。美術館を訪れる人が最初に接するスタッフであり、美術館の顔とも言える。

また、当番班が切り抜いた新聞記事を整理し保管する「資料整理班」、美術館の蔵書管理を行う「図書整理班」、対話型鑑賞を行う「VT班」、美術館の事務作業や当番班を補助する「館事務補助班」という4つの「専門班」が、それぞれ10名前後の有志によって運営されている。過去にはこの他にも様々な専門班が生まれていたようだが、現在は上記の4班に落ちている^{*}。着任当初の筆者はその活動内容の多様さや、それを支えるボランティアスタッフの知識と経験の豊富さに驚くばかりであった。

上記の活動を行うための研修も各種あり、例えば新規会員向けに毎年行われる新人研修では美術館の所蔵作品や教育普及活動、エントランス案内等々について全6回の講座が用意される。また収蔵品展の展示替え毎に、担当学芸員によるボランティア向けの展示解説も実施している。

以上、現在の当館ボランティアの活動内容をまとめたが、約30年前に発行された『10周年記念誌』を見直してみると専門班の構成以外に大きな差ではなく、発足当初の活動内容が連綿と受け継がれていることが分かる。

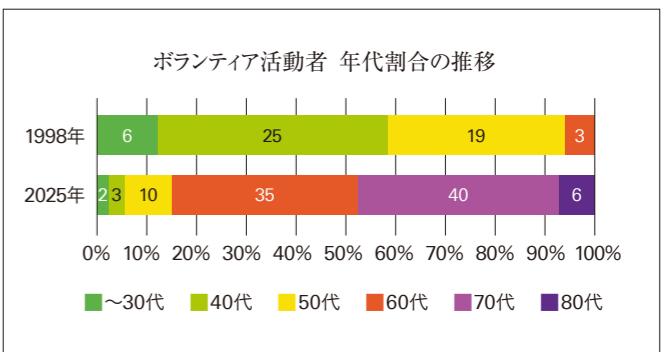
しかし構成員の内容はかなり変化している。『10周年記念誌』によると、当時のボランティアの年代層は40~50代

が8割以上を占めていたが、2025年時点では60~70代が8割弱となっている。また男女比にもやや変化が見られ、発足10年以内の入会者のうち男性は1%程度であったが、現在は約12%にまで増えている。大ざっぱに解釈すると、ボランティアの主な担い手が当初は主婦層であったが、現在では退職前後の世代に移っているという傾向が読み取れる。

実際ここ数年の新規会員募集でも、応募者の年代層は50~60代が最も多い。専業主婦の方もみられるが、それ以上に仕事をしつつ空いた時間に美術館で活動してみたい、岡山に引っ越してきたばかりで交流の場を探している、あるいは退職を機に活動の範囲を広げたいという方が多く見受けられる。共働きが増加した時代背景を考えれば、この変化は当然の成り行きであろう。

このような背景をもつ担い手に対し、良くも悪くも求められる活動が多様で、かつ経験年数をある程度重ねることを前提に作られた当館のボランティア制度は、時に負担を強いいることがある。専門的な活動を支えるベテラン層の高齢化も重なり、組織を維持するためにはより柔軟な制度設計に向けたかじ取りと、各種活動内容のマニュアル化や再研修が不可避の課題となっている。

秋の新規会員募集では、毎年20名前後の応募者が集まる。美術館の活動に時間を割こうという一人一人の志に感謝しつつ、同時に美術館を拠点とした活動の場にはまだまだ需要があり、求められているのだと身が引き締まる。美術館での活動がボランティアスタッフの知識や経験、交流を広げ、人生を豊かにする一助となればと願いながら、彼らにとてのよりよい活動環境を模索する日々である。

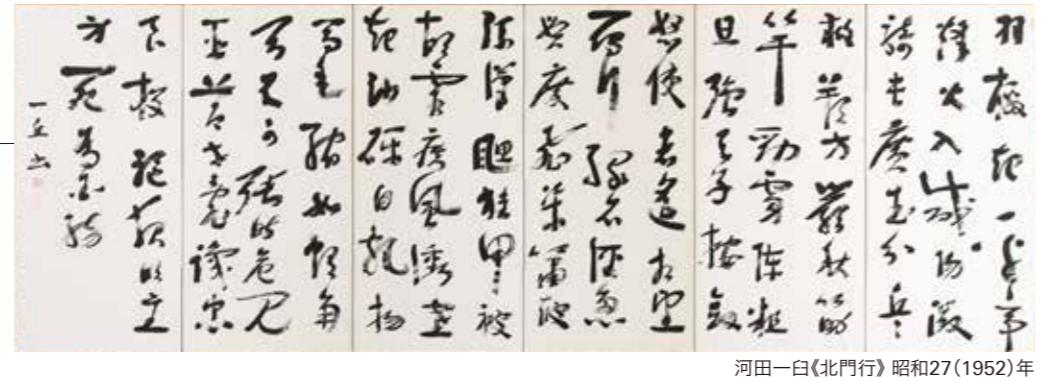


*: VT班に関しては、もとはボランティア組織とは別に作られ、後からボランティアの専門班として統合された。

新収蔵品紹介

File 28

河田一白
《北門行》



笠原 香絵(学芸員)

河田一白(1911-2000)は浅口郡船穂町(現倉敷市)出身の書家、教師。名は一夫。号に雄峰、一丘、一白。書は大原桂南(1880-1961)、上田桑鳩(1899-1968)らに師事。書道芸術院展、日展、奎星会展、毎日書道展などで受賞、また審査員を歴任。西浦尋常高等小学校などに務めたのち、昭和26(1951)年に岡山県立岡山朝日高等学校に赴任。定年まで教諭、書道部顧問として生徒を指導する傍ら制作にも精力的に取り組んだ。

なお、号の一丘および一白は師上田によって授けられたものである。一丘の号は山陽線の列車内で与えられたそうで、「師は書号の意味について『岡山県出身の天才画家浦上玉堂の絵の様に、岡山地方の山々は平坦な丘陵であるが、それでいて内部にボリュームがある』様にと。私はうれしい限りであった」と回顧している。

昭和27(1952)年、第8回日展に出品した六曲屏風《北門行》が特選を受賞した。南朝宋の詩人鮑照が、辺境で国防に死を賭す兵士の心情を詠んだ五言詩「代出自薊北門行」を引用する。筆を刷毛状にして白い空間を残すようにした筆運びが随所に見られ、その個性的な筆致が動きと風格を生じさせている。線や字の独創的な造形そのものだけでなく、その背後にある河田の気魄を感じられる点も本書の魅力であろう。

《北門行》について、のちに河田は「この『北門行』は百数十字を草書で沈潜させて書いたもので、文中末行に『死』の字があり、これを強調している。即ち師家の言われた『死んで死に切れ』であり、『絶後に蘇生する』の実証となったと言える」と振り返る。本書制作の前年から河田は厳しい参禪に打ち込んでいたが、その修行中に無字の公案、すなわち趙州狗子について師上田が口にしたというのが「死んで死に切れ」である。修行を通して行住坐臥の中に自己の内面を自覚し、まさに無我を実践し、その脱俗した精神を作品という形で発露したのだろう。

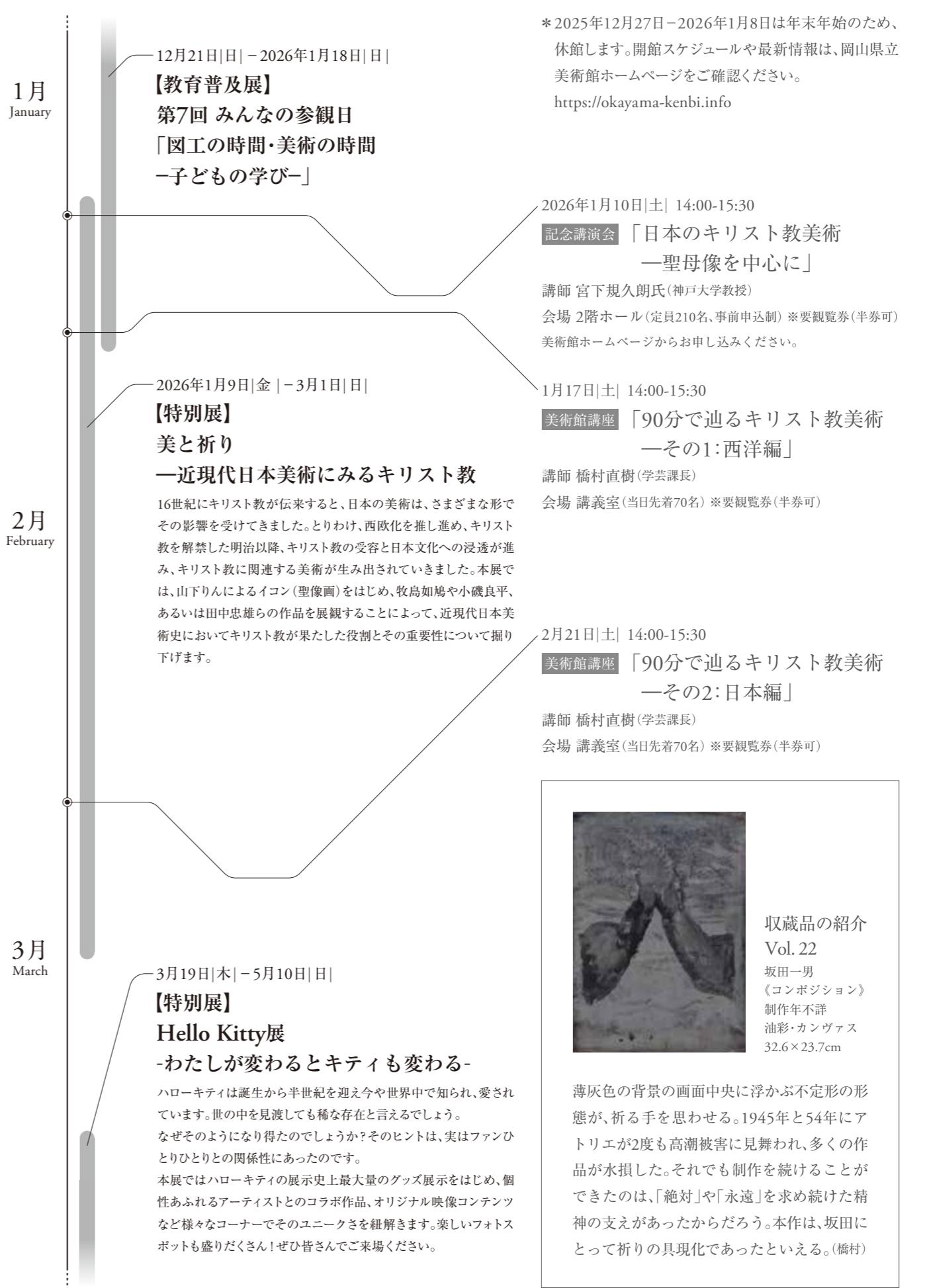
河田は昭和28(1953)年の《無門行》無鑑査出品、翌29年の落選を最後に日展に出品することはなくなる。師上田の日展脱落も昭和30(1955)年であった。書道展審査員や書道団体役員は昭和43(1968)年までに次々と辞し、確固たる名声を得ていた中央書壇を立ち去る。以降岡山の地を中心に、前衛書の先導者河田一白として書の道に生きることになるのである。なお、河田の生涯や人となりについては『書の深淵 河田一白の世界』^{*3}が詳しい。

*1: 河田一白『かえりみれば』
(三隆印刷、1978年)

*2: 前掲註1、傍点原文ママ

*3: 『書の深淵 河田一白の世界』(河田一白回顧展実行委員会、2007年)

展覧会スケジュール



館長コラム

大阪万博にて

守安 收

10月初旬、最終盤の大阪万博へ妻と子の三人で訪れました。実は私、前回1970年の万博にも出向いており、米国館で「月の石」を見ようとしたものの余りの人の多さに断念したことやインド館で生まれて初めて外国人と握手したことが記憶に残っています。当時18歳。今回は米国館から。携帯椅子を持参して2時間待ちで入館し、念願の石に対面。55年も経つと感激は薄れてしまうものですね。長い年月の推移があり、今や膨大な情報の中で暮らしているわけですから、月の石が埋没したのもやむを得ないのかな。大屋根リングは壮大で大混雑。歩くのも大変でしたが、大満足。▼夕方、大阪ヘルスケア館へ。そこは25年後の自分に会えるというのが目玉で、人気があって予約困難とのことでしたが、長女が予約済み。私は到底生きているとは思えないでの、もういいやと抵抗したのですが、老いては子に従えとばかりに連行されました。いくつもの検査の結果、現状の身体年齢は51歳（そんな訳がない）。25年後の想定画像では髪の毛も存在しています。私と同世代の人に「お前はもうすでに死んでいる」とはいえないもんね。妻は私よりも若いということにとても気分をよくしておりました。妻を喜ばすにはこれですね。▼ちなみにイタリア館は並んでも入れないというのが定評でした。ところが10月25日から来年1月12日まで大阪市立美術館でこれらイタリア館の至宝が展示されるという、実にタイムリーな企画が実現します。こういう商売（運営）上手、何よりも来館者が嬉しい取り組みは、我々も見習わなければ…。▼万博や瀬戸芸のおかげで当館の「平子雄一展」は、いつもより訪日外国人の数が倍増し、1割強を占めています。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口（東口）から
・徒歩15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
開館時間 9:00—17:00（入館は16:30まで）
夜間開館日は19:00まで（入館は18:30まで）
休館日 月曜日（休日の場合その翌日）／年末年始／展示替え期間中

編集後記

中西ひかる

今号が皆様のお手元に届く頃には、新しい年を迎えていらっしゃると思いますので、ここで新年のご挨拶を申し上げます。あけましておめでとうございます。さて、当館では現在2階展示室の設備メンテナンスを行っており、2026年5月頃まで閉室します。そのため、岡山の美術展は当面お休みなのですが、本誌の見開きに掲載した「美と祈り—近現代日本美術にみるキリスト教」では、岡山にゆかりのある作家の作品も展示されます。当館収蔵品からは、今号の表紙を飾った坂田一男や、鹿子木孟郎、小田宏子らの作品も紹介しておりますので、新年の展覧会もどうぞお見逃しなく。